

幼児の描画表現に関する縦断的研究(Ⅱ)

— 2年間にわたる発達の推移及びその類型化による検討 —

研究第6部

神田 久男・吉川 政夫

権 平 俊子・山本 清恵

柴田 良一

共同研究者

山田 正子(城北幼稚園)

I はじめに

一般に年齢の増加とともに「ひと」や「もの」に関する概念は増し、認知も正確になってゆき、それらを表現することも「現実」に近づくようになることは、精神発達においてよく知られている。すなわち、発達のみると、「ひと」や「もの」を描く行動は、加齢にともない、その内容が「主観的」、「非写實的」から「客観的」、「写實的」になってゆく。

著者らは、この描画の発達における方向性や順序性の事実をふまえた上で、同じ描画であっても、たとえば、インストラクションが許容的、非指示的で、被験児自身の知的・感情的な内的世界や想像の世界が能動的かつ自由に表現できるような描画条件の場合と(その例として樹木画や人物画など)、検査者や描画対象による指示、制限や方向づけが相対的に強く、観察的写生表現を要求されるような描画条件の場合とでは(その例として模写画など)、そこに、発達の推移による年齢差や個人差はもちろん、個人内差も何らかのかたちであるのではないかと仮定した。その仮定を確かめるために、著者らは、描画による表現欲求が強く、描画表現に著しい発達の变化を示す幼児を対象に、特に2つの描画条件を設定して、幼児一人一人の発達過程を重視する立場から、それぞれの描画の発達過程を3年計画で縦断的に追跡する研究に着手した。

初年度は、自己および自己をとりまく他者をイメージ化あるいは概念化したものの描画表現である人物画と眼前に存在する対象の知覚的描画表現である模写画の各年齢別発達と両画の相互関連性を、数量的、事例研究的にとらえた。その研究結果は必然的に横断的なものであったが、その内容は、日本教育心理学会第23回総会発表論文集(1981a, b)、日本総合愛育研究所紀要第17集(1981c)

において発表された。そして、2年目にも初年度と同様な手続で描画課題を実施し、その結果を日本心理学会第46回大会予稿集(1981a, b)において発表した。

さて、本研究も3年計画の最後の年となり、最終的な研究資料もそろったので、2年間にわたる人物画と模写画に関する縦断的研究結果に綿密な検討を加えて、幼児の描画表現活動の発達の諸相を明確化し、これまでの研究のまとめとしたい。

Ⅱ 人物画と模写画の縦断的発達と相互の発達の関連性

1. 目的

本研究の目的は、1) 同一幼児における人物画と模写画それぞれの発達の2年間にわたる(平均年齢4歳1か月から6歳1か月までの)推移、2) 同一幼児における2種類の描画相互の発達の関連性、および3) 描画表現における性差の3点について検討を加えることにより、幼児自身および幼児をとりまく他者をイメージ化・概念化したものの描画表現である人物画と眼前に存在する対象の知覚に基づく描画表現である模写画の幼児期における発達の特徴を明らかにしようとするものである。

2. 方法

1) 被験児 東京都内の幼稚園児38名(男児18名、女児20名)。本研究の初年度(被験児が幼稚園年少児の時点)には51名を数えた被験児は、その後2年間におよび縦断的研究期間中に少しずつ減少し、最終的に有効な被験児数は38名であった。

2) 手続 人物画と模写画(模写対象として用いた刺激図は擬人化して描かれたウサギ、図1参照)の2種類の描画課題を、同一被験児を対象に、各々の年少時(平均年齢4歳1か月)、年中時(同、5歳1か月)、年長時(同、6歳1か月)の計3回実施し、1年後ごとの描画の資料を2年間にわたって収集した。なお、描画課題の具

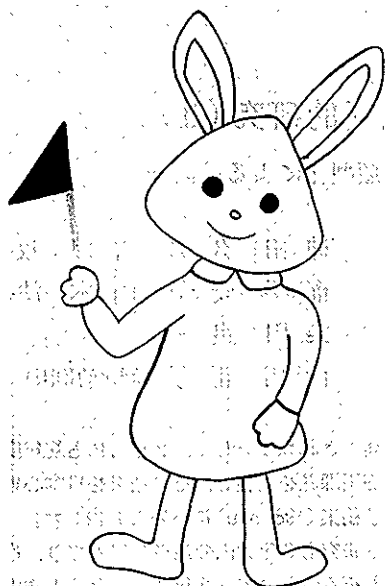


図1 模写対象として用いた刺激図

体的な実施手続については、幼児の描画表現に関する縦断的研究(Ⅰ)(前掲)に述べてあるので省略する。また、グッドイナフ人物画知能検査の結果と比較検討するために、F式幼児知能検査を年長児に実施した。

3. 結果と考察

1) 結果の得点化 結果を整理するにあたり、人物画と模写画を得点化した。人物画についてはグッドイナフ(Goodenough)人物画知能検査(小林・小野改訂版)の採点表を用いた。模写画については、採点項目(ウサギの体の部分)の形態(形、大きさ、位置、輪郭線)と色彩(モデルのウサギと同じ色彩がほどこされているか否か)の評価基準からなる採点表を作成した。ただ、今回の模写画の得点化の評価基準は前の2回の研究において用いた評価基準に修正を加えたものである。修正をほどこした理由は、初年度の横断的研究の結果において、模写画得点が年長児の月齢間で一応プラトーに達し、個人間差が減少してしまう現象が出現し、その原因として模写のウサギのモデルが年長児にとって比較的易しかったためではないかと考えられ、もう少しむずかしい刺激図を使った場合はどうなるかを検討してみる余地が残されたためである。しかしながら、模写画の刺激図を新たなものに変えることは今までの資料が結果としての意味をもたなくなる。そこで、刺激図のウサギはそのまま変えずに評価基準を今までのものより厳しくすることにより、年長児においても模写画得点に発達的な個人差がでやすいようにした。修正された評価基準の特徴は、模写

対象のもつ全体のバランスとリアリティ(模写対象の再現性、写実性)に得点の負荷を多くかけた点である。以上のように修正された評価基準に基づき、年少時、年中時の模写画の得点化を改めて行ったので、今回報告されている模写画の結果と前回までの模写画の報告結果に多少の相違がある点に留意する必要がある。

以上の評価基準により、年齢段階別に人物画と模写画の平均得点を表わした結果が表1である。また、図2は3か月ごとの月齢区分で人物画と模写画の得点結果の発達の推移をグラフ化したものである。図中、たとえば、3歳8か月の被験児たちは4歳8か月児たち、5歳8か月児たちと同一であることをあらわしているの、彼らの1年後、2年後の発達の推移がグラフから読みとれよう。他の月齢についても同様で、3歳11か月、4歳11か月、5歳11か月の被験児たちは同一であり、人物画得点と模写画得点の2年間の推移を確かめることができる。

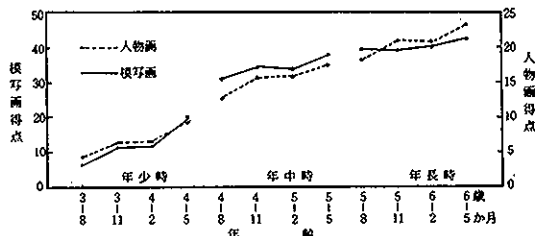


図2 人物画と模写画の年齢段階別の得点結果

表1 人物画得点と模写画得点の2年間にわたる推移

年齢段階		描画の種類	人物画	模写画
年少	N=38 平均年齢4:1	平均	7.0	13.5
		SD	4.09	8.32
年中	N=38 平均年齢5:1	平均	15.7	34.6
		SD	3.49	5.85
年長	N=38 平均年齢6:1	平均	21.2	40.8
		SD	4.85	4.38

2) 人物画の発達 表1から、年少時(CA=4:1)の平均得点7.0は人物画知能検査のMA換算表で4:1に相当し、被験児たちは年齢相応の知能発達を示している(IQ=102.0, SD=17.61)。年中になるとMAは5:11~6:1になり、IQは118.9(SD=13.16)と急上昇する。その傾向は年長においてもほぼ同様に維持されている(年長時のMA=7:1, IQ=115.7, SD=17.61)。この結果をわれわれが初年度に実施した横断的研究結果と比

較してみると、今回の被験児とは異なる年中児(CA=5:1, N=156)の平均得点12.76はMA5:1~5:7に相当し、やはり年齢相応の平均的知能発達水準を上回っているが、その傾向は今回ほど顕著ではない。同じく年長児についてみると、その平均得点19.37はMA6:9~6:11に相当し、IQに換算すると今回の結果と同じように高い値を示している。小林・小野(1976)によるとCA=4:6~4:11までの幼児104名について実施した結果と小学生1年生(CA=7:3)を対象にした人物画知能検査の結果は、IQ100を中心に分布していると報告されている。しかし、本研究の結果では、その傾向が年少時にはあてはまるが、年中時と年長時においては人物画知能検査によるIQはかなり高く出ており、その傾向があてはまらない。そこで、年長時に実施したF式幼児知能検査のIQを検討してみると、平均IQ=110.8(SD=14.15)で、やはり年齢相応の水準を越えていたことから、本研究の被験者の知能水準がもともと全体に高かったため小林・小野(1976)の結果とくいちがったと判断してよいであろう。なお、年長時の人物画知能検査のIQとF式知能検査のIQとを比較したところ、前者は後者に比べてそのIQは有意に高かった($t=2.28$, $df=37$, $P<.05$)。また、両知能検査のMAに基づく相関係数は.365で、両者間に低い相関がみられた。なお、図3は、人物画においてもっとも平均的な発達を示した同一被験児の4歳時、5歳時、6歳時の描画例である。

次に、人物画の同一幼児内における発達の関連を相関の有無からみると(表2参照)、年少時と年中時($r=.295$)、年少時と年長時($r=.308$)に低い相関がみられたが、年中時と年長時の間には相関がみられなかった($r=.074$)。これらの結果は、1年間という長期の時間間隔を置いて再検査を実施した場合、人物画の結果に変動が認められることを示している。ちなみに、3回にわ

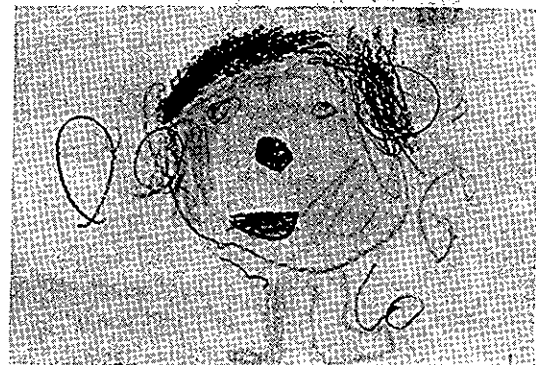


5歳時



6歳時

図3 平均的な描画発達を示した幼児の人物画の発達例



4歳時

たり収集された人物画の得点をそれぞれ偏差値に変換し、各幼児ごとに3回にわたる偏差値の推移をみると、3時点(年少時→年中時→年長時)ともに平均を上まわる(偏差値50以上)安定した発達を示した被験者が6名(高得点群)、逆に3時点ともに一貫して平均を下まわる低得点を示した被験児は7名あり(低得点群)、38名中の残り25名には3時点において一定した傾向はみられず、人物画の結果に変動がみられた。人物画の再検査信頼性

表2 異年齢間における人物画および模写画の相関係数

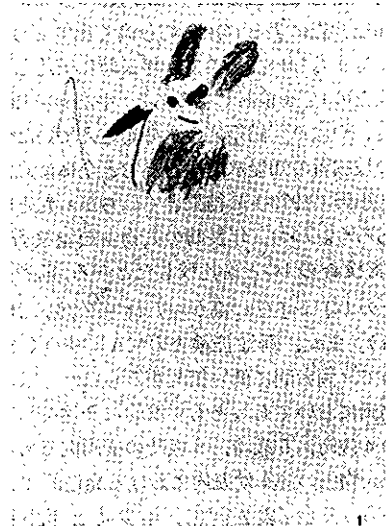
年齢の 組み合わせ	描画の種類	人 物 画	模 写 画
年 少 と 年 中		.295	.383
年 中 と 年 長		.074	.508
年 少 と 年 長		.308	.402

に関する研究結果、たとえばマッカーシー (McCarthy, D., 1944), マックカーディー (McCurdy, H. G., 1947), 桐原 (1944) などを総合すると、2 か月から3 か月の間隔を置いて再検査した場合の相関係数はほぼ .50 ~ .70 となっている。これらの結果から、人物画知能検査は、たしかに長期の間隔を置いて再検査をした場合、相関は低下するが、他の標準テストと比較しても信頼性の点でとくに問題とはならないとされている。しかし、本研究のように、あらゆる精神活動の面で著しい発達段階にある幼児を被験者とし、しかも1年という長期の間隔を置いた条件では、再検査信頼性の高低の問題をうんぬんするのではなく、被験児である幼児の描画に関する特性（たとえば、対象の知覚、認知、概念化能力や視覚—運動系の協応能力など）が発達の変化を遂げるために、相関が低くでたと考えるのが妥当であろう。

3) 模写画の発達 表1および図2から2年間にわたる模写画得点の推移をみると、その傾向は人物画においてもみられたが、4歳から5歳にかけて模写能力が急激に発達していることがわかる。また、それとともに、4歳→5歳→6歳と進むにつれてSDが小さくなっていることから、模写能力の個人差が年齢の上昇とともに急速に縮まっていることもわかる。これらの結果は、精神発達全体からすれば、描画表現を支える幼児の視覚—運動系の協応にもとづく描出技能、とりわけ対象の表象機能や言語による概念化機能を中心とした認知プロセスにおける情報処理能力がこの時期に促進されるために、描画による表現能力が急激な発達を遂げるものといえよう。図4は、模写画においてもっとも平均的な発達を示した同一幼児の4歳時、5歳時、6歳時の描画例である。

次に模写画の同一幼児内における発達の関連性を表2の結果からみると、年少時と年中時 ($r = .385$), 年中時と年長時 ($r = .508$), 年少時と年長時 ($r = .402$) ともにある程度の高さの相関が見い出された。この結果から、人物画に比べ、模写画は、同一幼児内において発達の変動が相対的に小さいといえる。つまり、年少時に高い模写画得点を示した幼児は、年中、年長時に進んでもやはり高得点を示す傾向があるし、逆の場合は一貫して低得

点傾向を示す可能性が比較的大きい。ただ、模写画の場合、模写対象が3回とも同一課題であったために、たとえ1年間という長い間隔があいていても、能動的で描画作業が許容的かつ自由な描画法である人物画課題と異なり、経験による学習効果が相関結果に影響を与えたとも考えられる。そこで、試みに、学習効果がからんでいない模写画の横断的研究結果と今回の結果とを比較したところ、年長の平均得点間 (初回 $X = 39.96$, $N = 174$, 今回 $X = 40.8$, $N = 38$) には有意差は認められなかったが、他方、年中の平均得点 (初回 $X = 27.9$, $N = 156$, 今回 $X = 34.6$, $N = 38$) は0.1%の有意水準で今回



4歳時



5歳時



図4 平均的な描画発達を示した幼児の模写画の発達例

のほうが高かった ($t = 3.58$, $df = 192$, $P < .001$)。もし今回の結果に学習効果が効いているとすれば、今回の模写画の平均得点は初回のそれよりも年中、年長ともに明らかに高いはずである。しかしながら、年中では学習効果を支持する結果が得られたが、年長では得られず、この結果からだけでは模写画の発達の関連にからむ学習効果の有無についての判断をただちに下すことはできない。

4) 人物画と模写画の発達の関連性 表3の各年齢段階における人物画と模写画の相関係数に注目すると、粗点による場合も、人物画IQ偏差値と模写画偏差値による場合も、年少時と年中時では両画の間はかなり高い相関がみられた。これは、一方の描画能力がすぐれている幼児は他方の描画もすぐれ、逆に、一方の描画能力が劣る幼児はもう一方も劣る傾向が強いことをあらわしている。この結果は、自己および自己をとりまく他者がイメージ化や概念化のはたらきを介して内面的に構造化された結果にもとづいて形成された表象である「ひと」という内的対象の描画表現能力と、眼前に存在する刺激対象の忠実な再現を教示によって要請された被験児の観察的構えにもとづく知覚対象の描画表現能力とが、同一幼児内において相互に関連をもちつつ等しく平行して発達する傾向をもつことを裏づけていると言えよう。

ところで描画表現活動を支えるはたらきは、認知機能と視覚—運動系の協応による描出技能であるといわれる。円や線を描くとか面を色でぬりつぶすなどのいわゆる描

表3 人物画と模写画の相関係数

年齢	人物画、模写画ともに粗点による場合	人物画IQ偏差値と模写画偏差値による場合
年少	.648	.447
年中	.526	.405
年長	.008	-.006

出技能は、同一幼児内において、人物画、模写画双方の課題場面ではほぼ等しくはたらくと考えられるので、両画の能力の発達にいちがいがあるとすれば、その原因は認知機能にあるといえよう。本研究の結果では、年少時、年中時に両画がそれぞれ緊密な対応関係をもって発達することが明らかにされたが、これは、同じ認知機能に属する、過去の経験から形成された概念化された記憶イメージと視覚的な記憶イメージを抽出、再生するはたらきと(人物画の場合)、刺激対象に注意を向け対象からの情報の選択、体制化、代表化や意味づけを行なう過程およびモデルと描出した模写画との比較照合過程などからなる知覚処理のはたらき(模写画の場合)とが、同一幼児内においてほぼ等しくはたらいっていることをあらわすものとうけとれる。

ところで、その傾向は年少ほど強く、年中になると多少弱まり、年長ではまったくみられなかった。この人物画と模写画の年齢別発達における対応関係は、横断的研究結果(年少児 $r = .59$, 年中児 $r = .50$, 年長児 $r = .38$)と類似する傾向をもってはいるが、今回の方が年長時における両画の対応関係の弱まりが著しい。初年度の研究報告(1981c)では、この結果を説明しうる仮説を3つあげた。それらをここで簡単に繰り返すと、①模写のウサギのモデルが年長児にとって比較的易しかったために、模写画得点が年長児のあいだで一応のプラトーに達し、個人間差が減少したため、②イメージや創造的機能をつかって描画することが好きで得意な子どもと、対象を観察して描くことが好きな子どもの個性が、年長になるとはっきり出てくるため、③年長児になると、イメージに基づく認知のはたらきと知覚のはたらきとの間に何らかの分化が生じる結果、個人内で両者がアンバランスになるためという3つの可能性を指摘した。そのいずれの仮説が結果に対して妥当な説明力をもっているかを検討するために、幼児一人一人の人物画と模写画の得点結果を年少時、年中時、年長時ごとにそれぞれプロットしてみたところ(図5、図6、図7参照)、年少時、年長時には、人物画得点と模写画得点双方の分布状態にそれぞれ正の関連をもつ散らばりがみられた。しかしながら、図7の年長時

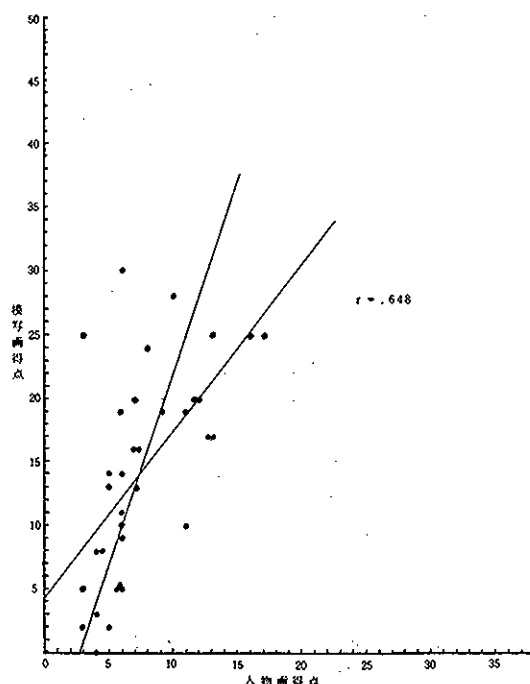


図5 年少時(CA 4:1)における人物画と模写画の相関

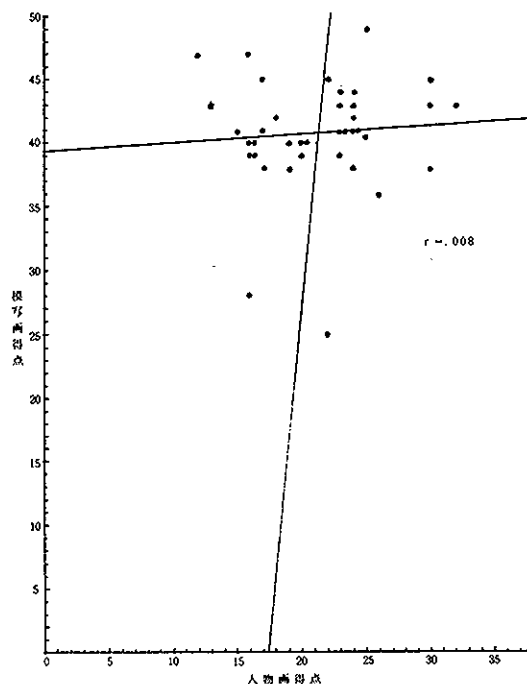


図7 年長時(CA 6:1)における人物画と模写画の相関

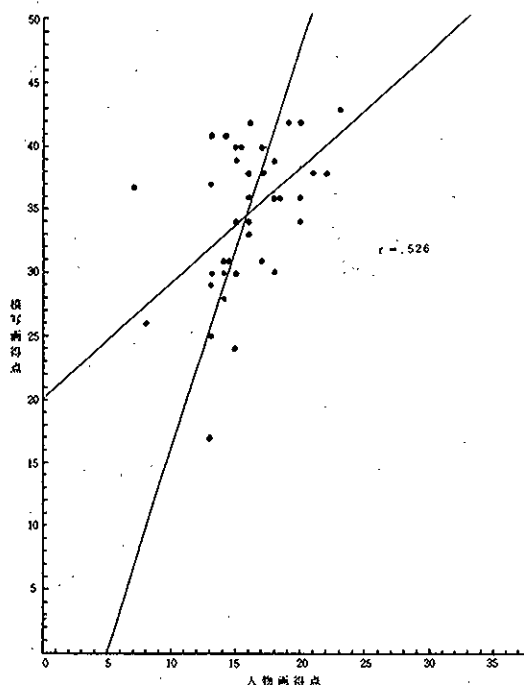


図6 年中児(CA 5:1)における人物画と模写画の相関

には、個人差をあらわす散らばりが人物画得点の分布には認められたが、模写画得点の分布では40点前後に集まっており、個人差をあらわす散らばりが認められない。このことから、年長における人物画と模写画の対応関係の消失は、仮説①によって説明できると考えられる。今回の結果の処理にあたり、模写画得点の評価基準を修正することによって年長児における個人差の出現の余地を広げたつもりであったが、結果は意図通りにはならなかった。年長児では模写能力そのものに本質的に個人差がなくなるという可能性も含め、今後、個人差の出る可能性の大きい、もう少しむずかしい刺激図を使った場合、模写画得点がどうなるかを検討してみる余地が依然として残された。

5) 描画表現における性差 表4から、年少時の人物画IQと模写画得点および年長時の模写画得点にそれぞれ性差が認められた。それ以外には統計的に有意な差は確認できなかったが、全般的にいて模写画は女兒が男児に比して優れた結果となっている。同じ傾向が、人物画については年少時に指摘できるが、年長時になるに従いその差はなくなる。幼児一人一人の2年間にわたる発達的变化についてみると、女兒は3回にわたる描画得点がすべて平均以上を示す事例が模写画で8例、人物画で6例みられたが、男児にはまったくなく、逆にすべてが平

表4 各項目における男女間の平均値の差

項目	年齢段階	M SD	男	女	t
F式IQ	年長	M	112.4	109.3	.66
		SD	13.43	14.54	
人物画IQ	年少	M	94.5	108.3	2.44 *
		SD	11.92	19.08	
	年中	M	115.1	122.3	1.70
		SD	12.03	13.21	
	年長	M	116.0	115.5	.11
		SD	12.19	15.70	
模写画得点	年少	M	9.6	17.05	2.99 **
		SD	7.34	7.53	
	年中	M	32.8	36.3	1.88
		SD	6.06	5.10	
	年長	M	38.1	43.2	4.29 ***
		SD	4.43	2.50	

df=36, * P<.05, ** P<.01, *** P<.001

均以下を示す事例が模写画で7例、人物画で3例みられた。以上の結果から、この年齢の女児の描画は男児のそれに比べて発達していることが指摘できる。ただ、その結果がただちに知的発達全般の性差を指摘することは、表4のF式IQの男児>女児（有意差はない）からも差し控えなければならないことは明らかである。

Ⅲ 類型化による事例研究

1. 目的

これまでは、幼児の描画の発達過程を人物画と模写画を中心に、各年齢段階を追ってその相互関連性を数量的にとらえてきたわけであるが、紀要第17集で報告した通り、年少時にさえ幼児一人一人の人物画と模写画を比較してみると、両描画間には必ずしも共通した傾向が認められるとは限らなかった。

まして、同一の幼児が2年の間に、さまざまな条件のもとに発達をしてきたわけであるから、幼児が表現する描画一つとってみても、全体としてのまとまりや構造化の程度、あるいは基本的な図形パターンや様式などにおいても、種々の変化・発展が起きていることは想像にかたくない。ただ、すべての幼児が2年の間に同じペースでもって発達してきたわけではなく、それぞれの子どもの経験内容、興味、心理の状態、あるいは描画技術などの変化・発展の程度にはかなりの個人差があるわけで、

それに対応して、幼児の描画内容にも個人差が現われてくると考えられる。

そこで本研究では、年少時に描いた人物画と模写画を、その特徴から5つのグループにまず類型化し、以後、年中・年長と2年間にわたってその描画内容がいかに推移していくかを事例を中心に検討することにより、幼児の描画の発達の諸特徴を、いくつかの側面から総合的にとらえようとするものである。

2. 方法

類型 まず、38名の幼児それぞれが年少時に描いた人物画と模写画とを相対的に比較検討し、その特徴から5つの群に分類した。そして、これを基準として、年少時の描画表現の内容が、年中時、年長時と時間の経過とともにいかに変容していくかを、各事例ごとに分析した。

① 人物画=模写画

人物画と模写画の得点が、共に年少児の平均得点にほぼ近似し、両描画間にはアンバランスな傾向が認められないもの。(12例)

② 人物画>模写画群

両描画の得点を相対的に比較し、人物画の得点の方が著しく高いもの。(5例)

③ 模写画>人物画群

人物画の得点に比べ、模写画の得点の方が著しく高いもの。(6例)

④ 高得点群

両描画共、その得点が年少児の平均得点よりも著しく高いもの。(6例)

⑤ 低得点群

両描画共、その得点が年少児の平均得点よりも著しく低いもの。(9例)

尚、分類はあくまでも一人の幼児の描いた2枚の描画の相対比較によるものであり、類型化のための基準となる得点は特に設定していない。

分析の資料 事例の分析にあたって、参考にした資料は、年少・年中・年長時の人物画と模写画に加え、各自が描いた樹木画や自由画、および年長時に実施したF式幼児知能検査の結果と、教師による幼児の行動記録表などである。

3. 結果と考察

各群において、典型的な、あるいは特異な描画得点の推移を示した事例を3例ずつ抽出し、それを表にまとめたのが表5である。

① 人物画=模写画群

12例中9例までが、年少・年中・年長を通じて、人物

表5 各群における事例（描画得点の推移とIQ）

事 例		人 物 画			模 写 画			IQ
		年 少	年 中	年 長	年 少	年 中	年 長	
	全体平均	7.0	15.7	21.2	13.5	34.6	40.8	
A-1	得 点 値 偏 差 値	6 47.5	17 53.8	24 55.9	11 47.0	38 55.8	41 50.5	115
A-2	得 点 値 偏 差 値	7 49.9	15 48.0	16 39.4	16 53.0	34 48.9	39 46.0	107
A-3	得 点 値 偏 差 値	6 47.5	15 48.0	12 31.1	10 45.8	40 59.2	47 64.2	107
B-1	得 点 値 偏 差 値	6 47.5	15 48.0	23 53.8	5 39.7	39 57.5	41 50.5	120
B-2	得 点 値 偏 差 値	11 59.7	20 62.4	25 57.9	10 45.8	36 52.3	41 50.5	103
B-3	得 点 値 偏 差 値	5 45.1	14 45.2	24 55.9	2 36.1	30 42.1	42 52.8	108
C-1	得 点 値 偏 差 値	8 52.4	16 50.9	20 47.6	24 62.6	38 55.8	39 46.0	105
C-2	得 点 値 偏 差 値	3 40.2	16 50.9	22 51.7	25 63.8	42 62.6	45 59.7	128
C-3	得 点 値 偏 差 値	6 47.5	23 71.0	16 39.4	30 69.8	43 64.3	47 64.2	139
D-1	得 点 値 偏 差 値	17 74.4	14 45.2	20 47.6	25 63.8	31 43.8	40 48.3	94
D-2	得 点 値 偏 差 値	13 64.6	17 53.8	30 68.2	17 54.2	40 59.2	45 59.7	124
D-3	得 点 値 偏 差 値	12 62.1	18 56.6	13 33.2	20 57.8	36 52.3	43 55.1	104
E-1	得 点 値 偏 差 値	3 40.2	13 42.3	16 39.4	2 36.1	30 42.1	40 48.3	133
E-2	得 点 値 偏 差 値	3 40.2	14 45.2	23 53.8	5 39.7	31 43.8	41 50.5	129
E-3	得 点 値 偏 差 値	4 42.6	8 28.0	17 41.4	8 43.4	17 19.8	38 43.7	114

画と模写画は各年齢別の平均得点にほぼ近似した発達を示し、特徴的な傾向はみられない（事例A-1）。ただ、残りの3例はすべて模写画の得点は順調に伸びているにもかかわらず、年長の時の人物画の落ち込みは著しい（事例A-2、A-3）。具体的には、年長になって服装に強い関心をもつようになった女兒などは、服の模様を丹念に描くことに熱中してしまい、身体の詳細は簡略化して表現している。これは人物全体の構成を考えるよりも、幼児にとって関心のあるもの、描きたいものを中心にして表現したり、これまでの経験から得意な部分に多くのエネルギーがそそがれたために、他の部分は単なる付け足しという意味合いが強くなったためと考えられる。このようなことから、幼児の人物全体を正確に把握し、それを構造化させて表現する能力それ自体の発達が鈍化したのではないということは、かれらが幼稚園で描いた他のイメージ画の内容からも確かめることができる。

⑧ 人物画＞模写画

この群では、年少時に比べ、年中時の模写画得点の伸びは著しく、5例全部が同年齢の幼児の平均得点に近似しているか、それ以上になり、その傾向は年長時にまで安定して引き続いている（事例B-1、B-2、B-3）。これは今回調査した幼児全体の傾向ともほぼ一致している。

この群の年少時の人物画は、円形や矩形、三角形といった、すでに幼児がもつボタン化された基本図形（ダイアグラム）の組み合わせの上に、髪の毛や瞳、手足の指などの細部を描き加えることにより得点が高くなっていた。一方、これが模写画になると、模写しようとする対象が、子どものもっている図形ボタンに一致している場合には、モデルの忠実な模写となりうるが、模写しようとするモデルの全体なり一部なりが、その子にとって未知のものであったり、既にボタン化された図形とは異なる場合、既存の図形をモデル画の図形に合わせて修正・

再構成できないために、得点が低くなっていたと考えられる。しかし、年中・年長になり、幼児の知覚・認知能力や、視覚—運動の協応能力が発達するに伴い、やや複雑な図形や曲線もある程度自由に描けるようになったので、模写画の得点も上昇したのである。

図8-1~4は事例B-1の年少時と年長時の人物画と模写画である。年少時の人物画と模写画を対照してみると、模写画は人物画とほぼ似通った構造で描かれている。つまり、模写画では人物画同様、顔の輪郭や目、口、鼻までは描くことができても、それに手足や胴を描き加えようとすると、どうしてもモデルを忠実に模写することができず、結局は頭足人になってしまっている。本児が年中から、さらには年長にもなれば、人物も全身をバラ

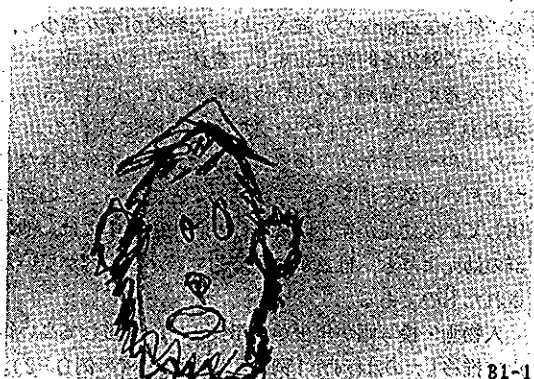


図8-1 年少時の人物画



図8-2 年少時の模写画

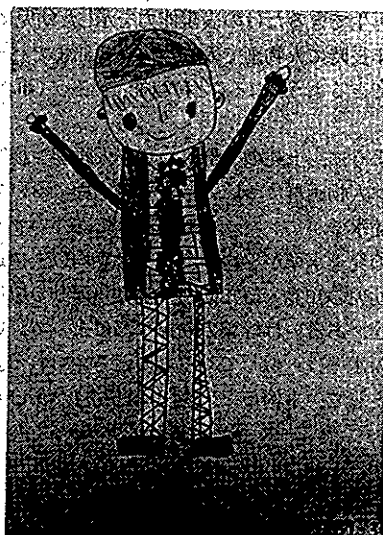


図8-3 年長時の人物画



図8-4 年長時の模写画

ンスよく描けるようになり、それがそのまま模写画にも移行している。

◎ 模写画>人物画群

事例数が少ないこともあって、この群では描画得点の典型的な推移のパターンは認められない。ただ、全体的な傾向からすれば、年少時に低かった人物画の得点も、年中・年長時には概ね平均にまで回復している。

模写画というものは、それがモデル画の正確な写しではないにしても、描かれた絵をモデルと対照し、違いを修正することは容易であり、年少時の模写画でモデルを

正確に再生できるだけの表現能力を示した幼児にとって、年中・年長時に人物画で人物全体を細部までバランスよく構成できるようになることは可能であろう(事例C-1, C-2)。

このように、上述の2群、つまり人物画>模写画群、模写画>人物画群については、発達過程において両描画間の発達水準がアンバランスであっても、いずれか一方の描画の発達水準が平均、あるいは平均以上に達していれば、幼児の知覚・認知能力や視覚-運動の協応能力などの発達、あるいは経験の効果などによって、いずれは両描画の水準は近似してくるものと考えられる。

例外として、事例C-3(図9-1~2)があげられる。



図9-1 年少時の人物画

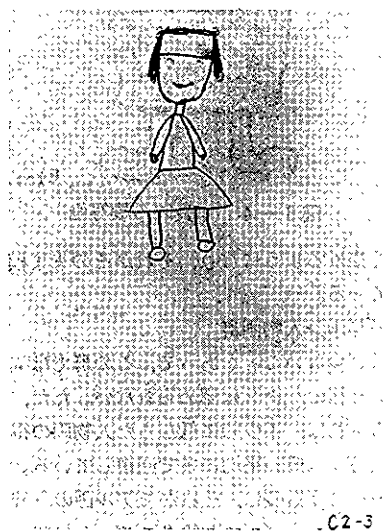


図9-2 年長時の人物画

模写画は年少から年長まで、一貫して高い得点で推移したのにもかかわらず、人物画は年少時で6点、年中になると23点(偏差値71)にまで上ったが、年長になると16点とかなり低い得点にとどまっている。この得点をグッドイナフの基準に換算してみると、IQは96となり、知能検査でのIQ139と比べると、30以上の差があることになる。本児は年長になって、行動が急に慎重になり、やや萎縮した面がみられるようになり、幼稚園では課題にはいやがらず一応こなしてはいるものの、自発的な行動に欠けるところが目立ってきたとのことで、この点は図9-2の人物画からもうなづける。

⑤ 高得点群

6例中3例までが、年を追うごとに両描画共全体の平均に近似している(事例D-1)。しかも、描画内容は幼児に独特な独創性や力強さといった特徴が年々減少し、かわって対象を的確に認知し、全体としての構成、バランスを考えて描画するという傾向がしだいにはっきりと現われている。すなわち、幼児の描画に特有のユニークさやバラエティーの豊富さ、それに自由奔放さなどがしだいに姿を消しているということである。この群に属している幼児が年少時に描いた自由画の中には、他の群の幼児よりも、はるかに創造的で豊かな内容が見いだされたものである。

人物画・模写画が年少から年長まで、一貫して高い得点で推移したのはわずか1例にしかすぎない(事例D-2)。日常生活でも周囲の物事には強い興味を示し、遊びの内容や人間関係の豊かさは知能検査の結果(IQ130)とも対応している。

また、事例D-3は特異な例である。模写画はすべて高い得点を得ているにもかかわらず、年長時の人物画の得点は年少時の得点と比べても、ほとんど差がないところまで落ち込んでいる。図10-1~3は本児が年長の時に描いた模写画、人物画、樹木画である。これを見ると、模写画はかなり正確に描かれている反面、人物画と樹木画は構成度が低く稚拙である。人物画や樹木画のような場合、表現対象は実際眼前になく、「人物」、「樹」というイメージを頭に浮かべ、それを手がかりに表現していくことになるが、このように自由にイメージを浮かべ、それにもとづいて表現していくのはとても苦手なようである。この幼児は、幼稚園でも絵画製作や音楽などで、与えられた課題については的確にこなしていくことができるが、自由課題になるととまどってしまい、能力は十分に発揮されていない。

⑥ 低得点群

年少時に人物画と模写画が、共に低い得点しか得られ



図10-1 年長時の模写画

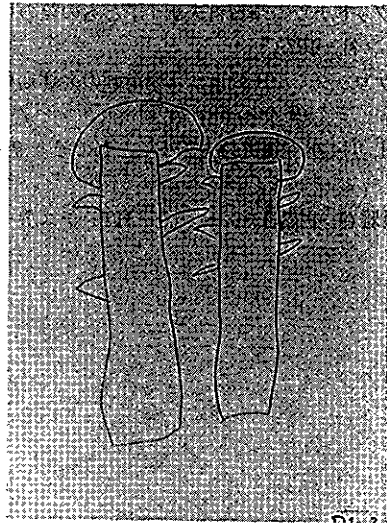


図10-3 年長時の樹木画

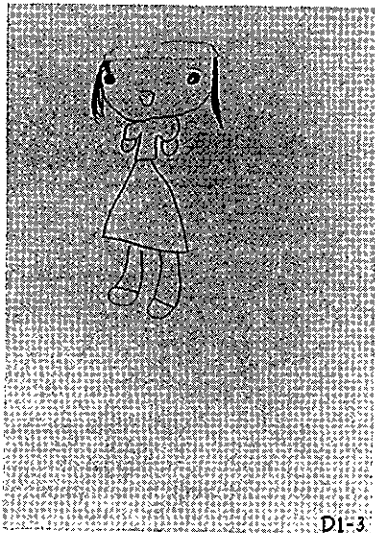


図10-2 年長時の人物画

例については、自由画でも描かれた対象が未分化で、全体のバランスが不均衡など、稚拙さが目立つ。また、幼稚園でも「理解力に欠ける」とか「他の子どもと同調行動がとれない」などの問題が、教師からも指摘されている。

＜参考文献＞

- 1) 吉川政夫・神田久男・権平俊子・山本清恵・柴田良一・山田正子：幼児の描画表現に関する研究Ⅰ 人物画と模写画の発達と相互の関連性，日本教育心理学会第23回総会発表論文集，1981a
- 2) 神田久男・吉川政夫・権平俊子・山本清恵・柴田良一・山田正子：幼児の描画表現に関する研究Ⅱ 類型化による事例研究を中心に，日本教育心理学会第23回総会発表論文集，1981b
- 3) 神田久男・吉川政夫・権平俊子・山本清恵・柴田良一・山田正子：幼児の描画表現に関する縦断的研究(Ⅰ) 人物画・模写画の発達と類型化による検討，日本総合愛育研究所紀要第17集，163-171，1981c
- 4) 吉川政夫・神田久男・権平俊子・山本清恵・柴田良一・山田正子：幼児の描画表現に関する研究Ⅲ 縦断的结果の検討，日本心理学会第46回大会予稿集，1982a
- 5) 神田久男・吉川政夫・権平俊子・山本清恵・柴田良一・山田正子：幼児の描画表現に関する研究Ⅳ 事例研究による2年間の推移，日本心理学会第46回大会予稿表，1982b
- 6) 小林重雄：グッドイナフ人物画知能検査・ハンドブック，三京房，1977.

なかったこの群では、年中になっても同様の傾向が続き、年中時で両描画が全体の平均に達したものは9例中わずか1例にしかすぎない。ただ、これが年長になると、残りの8例中、6例までが人物画か模写画の一方が、あるいはその両方がほぼ平均点にまで回復している。このグループに属する幼児が幼稚園などで描いた自由画をみると、確かに幼稚で構造は未分化ではあっても、既存の形態にはとらわれず、自由で生き生きとダイナミックな表現をしているものが少なくない(事例E-1, E-2)。

しかし、年中から年長まで一貫して得点の低かった2

- 7) M.グッドナウ：須賀哲夫訳「子どもの絵の世界」サイエンス社, 1979.
- 8) R.ケログ：深田尚彦訳「児童画の発達過程」黎明書房
- 9) G.H.リュケ：須賀哲夫訳「子どもの絵」金子書房 1979.
- 10) 高橋雅春：「描画テスト入門－HTPテスト－」文教書院, 1974.
- 11) M.Betensky：Self-discovery through self-expression use of art in psychotherapy with children and adolescents. C.C.Thomas Publisher. 1973.
- 12) 岩井寛(編)：「描画による心の診断」日本文化科学社, 1981.